

## 連載

### 1960年代後半の京都大学・理学部・数学教室、そして私 (5)

松本和一郎

(1966年度入学、1970年度学部卒業、1971年度大学院進学、1974年度同退学)

#### 1. 5回生スタート

タイトルから逸脱して、この記事の内容は1971年度である。新年度は、改革新制度の下での正規の授業である。溝畑先生の講究を取った。岩波書店から出ている先生の“偏微分方程式論”の第2章“超函数(distribution)”の輪読である。出席しているのは5回生の上田敏明・松波哲也・私に、先取りの3回生の浦部治一郎・矢野環で、正規の4回生もいたはずであるが思い出せない。5回生は年上を笠に着て威張っているし、3回生は実力者でこれまた威張っているから本来正規の4回生は埋没する。ある人が黒板の前で「この函数は偏微分可能なので連続です」と言ったら、タバコの煙を鼻から吹き出しながら矢野君が「偏微分可能でも連続でない函数があるでしょう」と切り込む。報告者はうろたえてこちらを見る。わたしは解析概論で勉強したばかりなのだが、昔から知っているような顔で「反例があるな」と言う。溝畑先生が笑いながら「良い条件の下で考えようとしているので、函数の連続は仮定して良いでしょう。偏導函数も連続と仮定して良いですよ」とおっしゃる。そんな雰囲気だった。院生になった伊吹和彦君も出席していたように思う。

そうは言っても、講究のレポートが余裕でできたわけではなかった。後に述べるように数学を一から勉強し直すのだが、まだルベグ積分にいたっていない。やむなく、積分はリーマン積分で間に合わそうとするのだが、“ルベグの定理”が出てきて私を困らすのである。リーマン積分論には“ルベグの定理”は勿論無い。こればかりはルベグ積分論を勉強するしかない。そういうわけで、レポートの順番が回ってくるときは昼夜兼行でルベグ積分論とディストリビューションを平行して勉強しなければならなかった。溝畑先生の岩波全書の“ルベグ積分”はコンパクトで大いに助かった。

数学教室(今の3号館)の南(今は6号館北翼が立っている)の空き地の西端に変電施設があり、その東に大きくない木造瓦葺き平屋の倉庫があった。ちょうど溝畑先生の研究室(2階)のすぐ下である。昨年度までは理学部闘争委員会の根城だったが、そこが“無所属”の学生の控え室になっていた。午後3時くらいになると、その部屋から合唱の音が聞こえてくる。曲はいつも“翼をください”である。

今私の願いごとが叶うならば  
翼が欲しい

：

この大空に翼を広げ  
飛んで行きたいよ  
悲しみのない自由な空へ  
翼はためかせ

モンキー・タンバリン(皮の張ってないタンバリン)のジングルの音にのせて聞こえてくるこの歌声を聞きながら数学を考えることは、「自由な空へ羽ばたく」幸せが体中に染みこむ思いで、至福の時であった。残念ながら、この歌声をうるさいと受け止める人

もいて抗議したとのことで、あるときからこの歌声はぶつりと消えて戻ってくることはなかった。しかし、歌声が無くなっても私はまだ十分講究の中で数学を楽しむことができた。

その頃、溝畑先生は朝倉書店の“数学解析”上・下巻を執筆しておられた。ある日「松本君は平均値の定理の本質は何だと思えますか?」と聞かれた。“本質”といわれると困るが、勉強したての「平均値の定理はロルの定理による。ロルの定理は、連続関数は有界閉集合上で最大値、最小値を取ることで証明できる」をまくしたてた。溝畑先生は「私は部分積分だと思えますね。こうやって部分積分をすると証明できます。これを繰り返せばテーラーの公式も証明できます」とおっしゃる。なお「私の証明の方が弱い仮定ですむ」とがんばると「いやいや、本質的に、ですよ」とおっしゃる。なるほど、部分積分は微積分の基本公式と積の微分公式であるから、部分積分に依る証明ならば微積分の“本質”に由来することが明解である。なるべく弱い条件の下でとばかり考えてきた私は“本質的に”という新しい課題をもらった。このような先生との会話は私が助手になった後も続いて、研究者として教育者として成長する糧となった。

溝畑先生の講究の他に平井武先生の講究も取った。こちらは L. シュワルツの教科書“*Théorie des Distributions*”の日本語訳を読むのである。フランス語原本や英語訳では既に第2版が出ていたが、日本語版は初版の訳であった。初版はページ数が改訂版の半分もなかったと思う。初版・改訂版ともに証明の書いてない本である。だから、自分で証明をつけながら読むか、別途他の教科書・論文で証明を調べるしかない。自分で証明をつけながら読んでいった。遅々として進まないが、力は付いた。1年下に優秀な学生がいて刺激になった。

西野先生の講究は数回出ただけであったが、強い印象が残っている。あるとき、その日は学生でなく研究者の方が論文紹介することになった。話が進むうちに、カリカリカリカリと音がする。西野先生がパイプの煙草の燃えかすをこさいでいるのだが、明らかにイライラしておられる。ついに口を切って「セミナーでは論文の結果を得るためのアイデアは何かを語らなければならない。ルーティンワークの式変形など要らないのです」とおっしゃる。「1つの論文に本質的アイデアは1つです。相当複雑な論文でもせいぜい2つです。それを読み取ることが論文を読むということです」ともおっしゃった。後々、私が他人の論文を読むとき、この言葉を思い返した。

西野先生は「松本君は知識を鎧のようにまとっていますね。身動きが取れないでしょう」ともおっしゃった。言われたときは、嫌な気がしたが、勉強を重ねていくと、1つの理論体系に本質的な原理は少ししかなく、それが分かると次第に身軽になっていく自分を体験した。身軽になるにつれて、五里霧中の霧が晴れてきた。終いには、よく分かっている分野では、問われると証明しなくても答が自然に思い浮かび、間違えることが無くなった。証明はつけようと思えば後から自然につけられる。西野先生はこのことをおっしゃっていたのか、と得心した。

そうして玉木敏嗣君のことを思い出した。3回生の頃、三木先生の複素函数論の演習である。誰も解けない問題があると、三木先生が玉木君に「玉木君、解いてみませんか?」と声をかける。玉木君は「この問題ですか」と言いながら黒板の前に出て何か書いている。そして「こんなもんですか」と言う。三木先生は「ああ、それでいいですね」。みんなが解けないのにマジックのような気がして「玉木君、なぜ解けたの」と聞くと、「まあ、あんなもんだよ」と言う。「あんなもんだよ」では解ける秘密の解明にならない、と少しムツとしたが、後々に思い当たったのはこの心境である。無理に証明を探さなくても、自然に出てくるのである。

研究テーマに何を選ぶか、について西野先生は「やりたいことをするのではありません。やらねばならないことをするのです」とおっしゃった。歴史の必然を受け止めよ、ということであろうと理解しているが、私自身は研究を必ずしもそういう風には進めてこ

なかったように思う。それがいけなかったようにも、それはそれで良かったようにも思うこの頃である。

そのほかに、連載 (2) で触れた定松さんの演義を取った。こちらは I. G. ペトロフスキーの英訳教科書 “*Ordinary Differential Equations*” を読んだ。

留年生のために数学教室 (今の3号館) の中庭にプレハブの建物が建てられた。よく覚えていないが、8畳か10畳ほどの部屋にいくつかの机・椅子と長机が2つ、それにダイキンの極めて強力な空冷式冷房機が付いていた。私は、昼前に朝・昼兼用を食べて午後1時前に控え室に行った。まだ誰も来ていないことを良いことに、暑い夏場は着くなり冷房機をガンガンかけて長机の上で昼寝である。下宿が暑苦しくてよく眠っていない分を取り返すためである。4時くらいになると寒さで目が覚める。鳥肌が立っている。健康に悪いことをしていたものだ。それから勉強にかかる。独立家屋だから好きな時間まで勉強し続けられた。土・日以外は、夕食に出かけて1休みするほかは勉強した (次項で述べる一定期間を除いて)。私がふんぞり返っているからか、他の学生はあまりこの部屋に来なかった。大学を出るのは午後11時か12時であった。下に述べるように、帰りの途中の中華料理屋で夜食を食う。したがって、下宿にたどり着くのは午前0時を回っていることが多い。下宿は午後10時が門限で、それを過ぎると玄関に鍵がかかっている。仕方がないから起きていて明かりのついている部屋の学生の名前を呼ぶ。この生活を6年間続けたが、幸いにも、家に入れなかったことは一度もなかった。

**[思い出： 中華料理屋]** 学部が上がってからは私の食事は、朝・昼兼用、夕食、夜食の3回である。夜食は午前0時頃になるから、中華料理屋しか開いてない。帰り道にあって開いているのは百万遍を少し北に上がった西側にあった“百万石”か、百万遍から京大女子寮の方に斜めに入った南側にあった“喜楽飯店”だけであった。百万石の方が少し安かったのでそちらに毎晩通った。夜な夜な、餃子4人前と、定食では一番安い“野菜炒め定食”である。飽きるも何も安いが一番。(私には胃が4つある、が持論で、餃子が入る胃・食事が入る胃・果物が入る胃・甘いものが入る胃である。少々高く付いても餃子をはずすわけにはいかない。)

学部5回生の、暮れも近いある日であった。数学科学生野球チームの練習に疲れて、加古幹夫君とたまたまその頃できたばかりの“農学部前・王将”に入った。(農学部前の王将の店は安定しない。少しずつ場所を変えながら何度もできては消えていった。) そうしたら「餃子10人前食べたら無料」の張り紙がある。日頃、中華料理屋に入ると餃子4人前が前菜の私にとっては、本菜を餃子6人前にすれば良いのだし、野球の練習後で腹ぺこだから「いけそう」と思った。制限時間は1時間。1時間以内に10人前を食べ切らなかつたら注文しただけの金を払う。注文は何人前かずつ分割しても良い。当時の王将は「安かろう悪かろう」で、やたらでかいがあまりおいしくないジャンボ餃子が6個で1人前。1時間で60個食べれば良い。1分1個である。こういうものは焦って食べると行き詰まる。店のお兄さんのアドバイスで酢はつけず、醤油とラー油少々だけをつける。加古君に頼んで、安全を見込んで50秒ごとに合図してもらって1個食べる。餃子食いマシーンになりきって7人前まで食ったらニンニクの臭いが鼻についてきて食欲が湧かなくなった。こういうときは休むに限る。加古君に聞くと25分残っているとのこと、とりあえず5分休むことにした。そうしたら、嫌気も去って、残り3人前は一気に食べてしまった。10人前食べると短冊に名前を自書することが求められる。「京都大学理学部 松本和一郎」の自書短冊がしばらく掲示されていた。

## 2. 小人閑居して不善を為す

院入試再挑戦の目標も決まり、何よりも数学をもっとよく理解したいという願いも強く、順調な留年生活の滑り出しであった。そんな週末のある夜、下宿で皆が麻雀をする

のを見ていた。私は麻雀ができなかったから見ているだけである。私が見ている打ち手が負けてばかりいる。「思わず、何で負けるんや?」と言ったら、負けが込んでいてイライラしていたのか切り口上で「ほんならお前がやってみろ」という。最低限のルールだけ聞いてやったみた。負けた。おかしい、論理的に打てば勝てるはずなのに。もう1回やってみてまた負けた。これはおかしい。かくして、マージャン狂いが1人生まれた。連載(4)の[思い出：下宿事情]で触れた岩崎君がルールの先生である。法学部らしく、規則にやかましい。はじめから役の翻数はもちろん符の数え方や点数の計算もたたき込まれた。実に論理的にうまくできている。その日からは、ひとの顔を見ると「マージャンしょう」。初心者がそうそう勝てるものでもなく、負ければ負けるほどもっとやりたくなる。そんなある日、鶴敏朗君の下宿に遊びに行っていて、やはり「マージャンしょう」。鶴君とたまたま遊びに来ていた鶴君の友人と伊吹君と私でマージャン開始。鶴君の友人にコテンパンにやられた。そのマージャンのあきれほどの強さは、我々とはレベルが違い、凄みすら感じた。

[思い出：酒・たばこ・パチンコ・麻雀] 私が入学のために京都に発つ前の日、父親が「和一郎、酒・たばこ・パチンコ・マージャンは勉強の妨げになるからするな」と言った。それまで親の言うことに従ってきていたから、1回生のときはコンパのときも酒を飲まずに過ごした。しかし、みんながうまそうに酒を飲んで盛り上がっているのに、これはない、と決心した。親の言うことは半分聞けば良いだろうと思い定めて、2回生からは「酒は飲むがタバコは喫わない、パチンコはするがマージャンはしない」ことにした。ところが根が不器用だから、パチンコはすぐ球が無くなる。あるとき50個(1個2円)をストレートで無くしたときに、嫌気がさしてパチンコは止めてしまった。留年時はパチンコ・マージャン席は空いていたから、マージャンを始めるのに抵抗はなかった。

後年、ある人にこの話をしたら、「松本、一番大事なものが抜けているんじゃないか?」と言う。“オンナ”だそう。父親は“オンナ遊び”など全く頭に浮かばなかったのであろう。堅物の父であった。気付かなかった私もカタブツなのであろう。

### 3. ふと気がついた

鶴君の友人のマージャンの桁外れの強さに圧倒されてしばらくたった頃である。5月はじめであった。ゴールデンウィークで下宿にいる日が続いていた。ある日、ふと、このまま院入試を再度受けたらどうなるか考えた。私がグレードアップしない限り“200点の1割”は変わらないであろう。むしろ、忘却により結果はより悪くなるであろう、と思い当たり、背筋が寒くなった。今年の院入試は正規の8月末に行われる。これはいけない。間に合わない。この日このときから魂を入れ替えた。組織的数学復習の開始である。すべてを分かっていることはハッキリしているのだから一からやるしかない。

まず、微積分である。これには思い入れのある“解析概論”を教科書に選んだ。今と違ってA4に近い特別大きい本であった。1ページ目から納得のいくまで考えて進む。高木貞治の講談調のテンポの良い文章に、大いにはかどった。特に、“無限級数 一様収束”と“解析関数、特に初等関数”の章には感激した。複素関数論については後に、楠先生の“解析関数論”(廣川書店)で勉強し直した。代数学者と解析学者とで理論の受け止め方に違いがあるなという印象を持った。研究者になってから、楠先生の本にはしばしばお世話になった。

次は線形代数である。1回生のときの教科書は小松醇郎・永田雅宜両先生共著の本であったが、文章になじめなかった。それで、定番の佐竹一郎“行列と行列式”(現在は改題して“線形代数学”)となっている。時代の移り変わりを感じる)を選んだ。よく分かる本で、「ああそうだったのか」「なるほどそうか」の連続である。学んでいくうちに、1回生数学C担当の菊池先生(たしか近畿大学からの非常勤講師だった)がおっしゃった言葉が次々と思い出されて、あの言葉はこういうことだったのか、こういうことをお

しゃりたかったのか、と合点がいった。4年前のことで、記憶しているなど思いもしなかった言葉が海馬から止めどなく流れ出てきた。深層記憶とはすごいものである。

次は集合と位相である。これはどの本で勉強したか思い出せない。ただ、おおいに苦労したことだけは覚えている。

函数論は先に述べたように楠先生の本で再度固めた。

それにしても、習った当座はなんだかよく分からなかったものが、今ならスムーズに分かるのは何故か訝しく思った。結局、分からないなりに使わざるを得ず、使っているうちに慣れてきて違和感がなくなったからではないかと思いついた。「習うより慣れよ」とはこのことを言っているのだと思う。「凡人が分かる」ためには「慣れて」かつ「学び直す」ことが必要なのであろう。「読書三遍」である。

#### 4. 蒲田闘争

この間に当時の佐藤首相の“日米安保条約自動延長”に伴う訪米があった。“安保条約自動延長反対”を主張していた私には、これだけは「政治の季節は終わった」ではすまされないものがあつた。佐藤首相訪米の前日、独りで蒲田まで行って、入れてくれるデモに加わろうと決めた。ベ平連は各地にあつたが、地域毎に行動力に大きい差があつた。神奈川のベ平連は戦闘的と聞いていたのでこれに入れてもらった。一晩中デモを続けたが、結局、デモ隊の頭の上を佐藤首相を乗せたジェット機が飛んで行った。せめてもの抵抗で「佐藤首相はそんなにアメリカが好きなら帰ってくるな」と叫んだ。かくして、私の当面の政治闘争は終わった。

#### 5. 学生村

函数論を勉強し終わったら、7月の半ばも過ぎていた。暑い京都を離れて学生村（今でもあるのだろうか、勉強を目的とする学生向けの民宿である。長野県など、涼しいところに多かった）で勉強することにした。雑念が入るといけないから、長野県と岐阜県の境目のド田舎を選んだ。パチンコ屋や雀荘のある町からバスで1時間入り込む山村である。独りでは寂しいから竹本茂男君に声をかけたら「おっ、今度は化学科を受けるわ。今から勉強せなあかんから行くわ」との返事。「化学で、少しは勉強してあるのか？」と聞くと「すべて今から」とのこと。大胆なものである。

まだまだルベグ積分・函数解析・群論・ガロア理論・位相幾何など残っているから、どれでもいけるようにどっさり本をトランクに詰めた。持ち上げるのも容易でないほどになったが根性で持って行った。

次に何を勉強するか。解析学優先で、函数解析を選んだ。またもや「積分論はとりあえずリーマン積分があるから」にすぎた判断であつた。教科書はコルモゴロフ・フォーミンの“函数解析の基礎”である。これは名著である。よく分かる。

私は勉強に身が入ると対話形式の掛け合いを口に出したり、歌い出したりする。歌うときも、ただ歌ったのでは面白くない。何か趣向を凝らして歌う。学生村に行ったときは“七つの子”である。「かーらーすなせなくの」である。この歌の「かわいかわいとカラスは鳴くの」のところで、「かわいかわい」はカラスの鳴き声だから、声高らかに高い音程で引き延ばして「カワーイ、カワーイ」と歌うのである。残念なことに、この歌には法学部の大学院を目指す学生から苦情が来た。「法学というのは、一つ一つの事柄を体系として論理的に組み上げていく。それがほぼできたと思っているところにカワーイ、カワーイと唄われると体系がガラガラと崩れてしまつて最初からやり直さなければならない」とのことである。せっかくの私の出し物はお蔵入りとなつた。

1ヶ月の予定で学生村に行ったが、函数解析をあげるのに2週間余もかかってしまつた。次に群論を、と思つていた頃である。宿のおばさんが「野菜ばかりの食事では申し訳

ない」と思ったのか、町から遠路やって来た行商の魚屋さんから鯛を買って振る舞ってくれた。これが裏目に出た。私は古い魚に当たりやすい体質なのである。翌日からジマシンの出た。私のジマシンはでかくて、おなかに水平に2本線がある。実はそれが背中に回って双方で閉じてやっと閉曲線となる。おなかから背中にかけて400メートルトラックができたようなものである。とても勉強する気にならないから町まで医者に行くことにした。このとき、ド田舎がまずかった。バスが朝に1往復、夕に1往復しかない。朝イチで町に行って帰るともう夕食前である。全く勉強にならない。医者は「明日もいらっしやい」と言う。いつまでたってもジマシンは引かないし、残りをキャンセルしてとりあえず横浜の姉のところに転がり込んで、宮崎の実家に帰る体力をつけた。

## 6. 院入試再挑戦

這々の体で宮崎に帰ると、教科の勉強よりもレポートの作成が急がれた。テーマは、アダマールの *partie finie* によりラプラス方程式や波動方程式の基本解を構成することと *partie finie* が変数変換に不変なことを直接証明することである。平井先生の講究のシュワルツの教科書で *partie finie* により基本解が作れることを知識として学んだが、証明が付いてない。その証明を自力でつけること。さらに、溝畑先生に「*partie finie* って人工的ではありませんか?」と聞いたら「いやいや、*partie finie* は変数変換に不変ですよ」と言われた。定義だけ見るとまるでご都合主義のような *partie finie* が変数変換に不変だなんて、これは自力で証明しなければなるまい、というわけである。*Partie finie* は単項式の指数に関する解析接続になっている。解析的領域から、極が現れると極を回避して解析接続していくのである。その極が独立変数の方の変数変換によって位数を変えないことをまず示さないといけない。ところが、変数変換によって1位の極が2位になってしまう。いくら計算し直してみてもそうである。残された日は少なくなるし、呻吟する日々であった。「学校の試験には習ってないことは出ない。100点取るのが当たり前だ」が持論の厳しい父が「体を壊すといけなから中止しろ」と言ったほどである。そんなある日、「極に影響しない安全な項」と思って顧みていなかった項をチェックすることを思いついた。藁にもすがりたい気持ちである。それが大正解。影響のない項と見ていたのが間違いで、そちらからも2位の極が出てきて両者が打ち消し合うのである。間に合った。このとき「自分はセンスが悪い」と痛感した。

院入試は近いが、教科の勉強は道半ばだし、語学の手当は何もしていない。

昨年のドイツ語に懲りたから、大学で学んだ第二外国語にこだわらずに、やりやすい言語を第二外国語として選ぶことにした。どうせ全ての単語を辞書で引いて訳文をひねり出すのならば問題文が短い方が良い。昨年度の試験の時に気づいていたのだが、ドイツ語よりフランス語の方が問題文が短いようだ。過去問を手に入れて比較してみると、問題文のしめる面積はそう変わらないが、毎年フランス語の問題文はフォントがやたら大きい。一方、ロシア語はやたら小さい。単語数を数えてみると、フランス語を1とすると、ドイツ語2、ロシア語4である。決まった。フランス語で受ける。無謀にも、辞書と文法書を持って行って試験会場で生まれて初めてフランス語を読んだ。昨年度と同じで英語に時間を取られてフランス語に回す時間は少ない。やむなく、前置詞は飛ばして訳すことにして辞書を引かなかった。ところが、おかしなことになった。「コーシーは連続の概念を確立し、一様収束の概念を確立した。アーベルが具体例を挙げることで収束と一様収束が異なることを示した。」なんだか変でしょ。でもタイムアップ。最終日の面接でしかられた。「君は否定文を知らんのかね」「ne」や「pas」も捨ててしまったのだ。「大学院に入ったらフランス語を勉強します。数学に出てくるフランス語は易しいですから」と言ったら数理解析研究所の松浦重武先生が「いやいや、僕は接続法の何とか用法を論文で見たことがある」とのたまう。困り果てて、「フランス語を勉強してなかった伊吹君もちゃんとやれてますから」と言えることは何でも言って許してもらった。

数学の“基礎”は勉強が幸いして、自信を持ってほぼ満点である。“専門”が問題で、解析からルベグ積分・函数論・ヒルベルト空間論と出題されているが、溝畑先生が出題したとおぼしきルベグ積分の問題の解答を思いつかない。やむなくこれを回避して代数の問題を1問入れて3問選択を満たした。これも最終日の面接で「なぜルベグ積分の問題を選ばなかったのか」と聞かれて、「自信がなかったからです」と答えた。嘘ではない。「ルベグ積分はまだ勉強していません」とは言いづらかった。今から思えば、基礎的な良い問題であった。

2日目のプレゼンテーションは(大)成功であった。

かくして、合格をもらった。数学の試験の点は200点中8割以上あったそうだ。

合格発表の後、後輩が「次の院入試を受けたいのですが、何を勉強したら良いですか?」と聞いてきた。正直に「基礎が大事だ。3回生までの講義をしっかり固めれば大丈夫だ」と経験を語った。これが大失敗で、翌年の試験はやたら高級な難しい試験問題であった。後輩は不合格であった。後輩には悪いことをした。この、難しい院入試問題はかなりの年数続いた。後に助手になってから、張り出された試験問題を見て、制限時間内に解答を作るのに苦労した。ずっと後になって、溝畑先生に「なぜ私が合格した翌年からあんなに入試問題が難しくなったのですか?」と聞く機会があった。先生は笑いながら「君がいかんのですよ」とおっしゃる。学科の教授会で「半年勉強したくらいで20点から160点に上がるのは問題が易しすぎるからだ」との声が出て、問題を難しくするように変わったのだとのこと。「それで、今はまた易しくなったのはなぜですか?」と聞くと「難しい問題を高得点でクリアした学生が必ずしも伸びないので見直しました」のだそうだ。筆記試験で将来性を判断するのは難しいことである。

さて、前号連載(4)で書いたように、昨年度は優秀な外部受験者が軒並み不合格であったことを訝ったが、気になるので今年も初日午前中の数学の試験が終わった後、外部受験生の控え室を覗いてみた。今年も「僕は1番はこう解いた」「2番はこう書いた」と意気軒昂である。それで分かった。彼らがこう解いた、こう書いたといっている答が、ほぼ間違っている。昨年度はその間違いを私は見抜けなかった。今年も勉強の甲斐があって、間違いが分かるようになったのだ。昨年度の2日目に永田先生がおっしゃった「ほら間違っているじゃないの」が今年度は私にも分かるようになったのだ。ものが分かっていないということは怖いもので、他人が実際以上に優秀に見える。的確な判断をするには自分が実力をつけなければならないことを痛感した。

外部受験者の名誉のために言っておくと、この試験で、私の専門では西和田公正君が東工大から合格してきて極めて優秀であった。外部受験者の中にももちろん優秀な人はいるのである。

院入試の合格を両親に電話で報告したら、父が喜んでくれて「帰ってこい」と言う。夏休みに帰ったばかりなので「すぐ新学期が始まるし、正月に帰るよ」と言ったのが父と交わした最後の会話となった。11月末に列車事故で突然他界した。その旨を溝畑先生に告げると「葬式はやり直しのきかないことですから納得のいくまで帰っていて良いですよ。セミナーのことは心配しなくて良いです」とおっしゃった。事故にもかかわらず、父の死顔は穏やかであった。心に父の死が定着せずに、ひょっこり玄関から「今帰った」という声が聞こえるような気がした。母は5年間ほど体調がすぐれなかった。

## 7. スキー旅行

父がいなくなったような気がしないので、京都に戻ると父の死以前と変わらない生活に戻った。2月も末になるとみんなの進路も決まる。仲の良いもの同士、最後に旅行をしよう、ということになった。冬だし、スキー旅行に決めた。竹本君が野沢温泉が雪質が良いと勧めるのでそこへ行くことにした。卒業までの日程からして割とすぐ行かなく

ればならない。宿をどうするか。これまた、竹本君が野沢の観光案内所に聞けば何とかなると知恵を出した。野沢まで電話すると料金が高いな、と思案していると、未だ残っている“解放区”の電話を使うことを思いついた。当時は物理学教室の香川助手の研究室が未だ解放区の看板を掲げていた。そこに行って電話を借りた。当時の電話はダイヤル式で、特定の電話以外は交換を通さないと学外につながらないように設定されていた。交換を通さずに学外の電話番号を回すと交換機が作動して自動的に切れるようになっていた。しかし、蛇の道は蛇、あえて学外のかけたい電話番号を回して最後の数字のときにグイッと強制的にダイヤルを戻すと、交換機を飛ばして外部につながった。(他にも交換機を騙す方法はいくつかあった。今はデジタル式になって、こういう裏技は効かなくなった。) 104で野沢の観光案内所の電話番号を聞いて案内所に電話すると、“虎屋”を紹介してくれた。我々にとってはいささか宿泊料が高かったが、「支払いのときに交渉すればええやん」という声もあって1週間の滞在を予約した。この電話代は誰が払うのか今もって知らないが、いずれにしても、もう時効であろう。

同行メンバーはマージャンをするために交代要員も考えて6名を予定した。ハッキリ覚えていないが、竹本茂男君、伊吹和彦君、上田敏明君、松波哲也君、林健君と私であったと思う。ところが出発の2日ほど前に馬場金司君が入れてもらえないかと、と言ってきた。競馬で勝って金ができたとのことである。6名でも7名でも1部屋に寝られるであろうとOKした。

当時の学生は、宿泊費を節約するために夜行急行(寝台車や特急は高すぎる)で行く。床が平気な私は座席の下に大の字になって寝入った。野沢の駅に着くと、林君が胃が痛いという。とてもスキーは滑れないというので、林君はそのままUターンして高槻の実家に帰った。後で聞くと、汽車が家に向かって動き出した途端、胃の痛みが止まったそうである。家族の仲が良く、家族を離れて旅行するのは初めてだと言っていたが、繊細な人であった。牛乳の“テトラパック”の命名者である。

この1週間は生涯の旅行で一番楽しい日々であった。朝は朝食が終わるとゲレンデへ。各自ばらばらに自由に滑り、たまには一緒に頂上から滑り、昼食もゲレンデの食堂で摂り、午後5時に待ち合わせて寒くならないうちに宿舎へ。野沢の地元の人が行く無料の温泉で体をほぐし、帰って夕食。一杯のビールがうまい。夕食後はマージャン。宿の向かいがストリップ劇場で、怪しい音楽が流れてくる。くねるような音楽に包まれてマージャンを打つのも面白いものである。劇場が11時にはねると帰る客のがやがや言う声が聞こえる。これを合図にマージャンは打ち切り。明日に備えて就寝である。健全なものだ。

楽しい日々も終わって勘定を払うとき、「さあ、値切るか」と言ったら、竹本君に「あほかお前は。こんだけの内容でこの値段は安いくらいじゃ」と言われた。このとき「ものの価値・値段は自分で見定めるもので、単純に安いほど良いと思うのは間違いである」ことを学んだ。この時代に早、フェアトレードの精神である。この、時代を大きく先取りした考え方が、私のその後の生き方を大きく変えた。「自分で見定める」ためにはたくさんのお金を自分の目で確かめておかねばならないから、普段の努力が要る。大変なことではある。

この1年余は私の生き方を変える多くの“言葉”に出会った。人に語りかける言葉の大切さが身にしみた私は、龍谷大学に移ってからも努めて学生に“言葉”をかけるように心がけた。しかし、思うようには受け取ってもらえないことが多かった。“言葉”の発信の仕方が下手だった所為もあろうが、受け取る気が無かったり受け取る能力が無かったら伝わらないものだと無念な気もしている。

**[思い出： 雪]** 私が育った宮崎の雪は、小さい白い破片がハラハラと降ってきて、地面に届く前に溶けて消えるものである。大学時代に正月に帰省していたら“積もる雪”が降った。翌日の朝刊のトップ記事が「30数年ぶりの積雪」であった。雪だるまの写真



が添えてあるが、白ではなくブチである。薄く積もった雪をかき集めると、土が混じるのは致し方ない。

大学に入って最初の年の12月、格別の京の底冷えの夜にどか雪が降ったらしい。朝起きて窓を開けて銀世界に「ユキだ!」と叫んだら、下宿の子に「松本のお兄さん、雪で喜んではる」と笑われた。その日は1時限目に古川先生の政治学の授業があった。積雪を知らない私は、いつものように靴下履きで下駄を履き、降りしきる雪の中を傘をさして大学に向かった。これがまずいとすぐに思い知った。雪は傘の縁を回り込んで足の上に落ちる。落ちると体温で溶けて0℃の水が足をしめらせる。冷たいことこの上ない。しびれる足を引きずって教室に着くと、私が最初の到着者であった。ありがたいことにダルマストーブの石炭がクワーと火を噴いている。びしょびしょの下駄をストーブの上に乗せて乾かすことにして、靴下も脱いでストーブの周りの柵にかけて、椅子にふんぞり返って体を温めにかかった。おもわずうとうとうしていると、きな臭い。飛び起きると下駄の歯から煙がもくもく上がっている。そんなことをしていると、もう一人、地質鉱物学科に進んだ樽野君が来た。すぐに古川先生ももっとひどくなった雪の中をやってこられて「やあ、やっぱり来ていましたか」と言って授業を始められた。結局、学生は2人だけであった。

**[思い出： スキー]** 雪が珍しい私だから、1回生の学習の全日程が終わると、S3組の仲間と語り合っけてスキーに行くことにした。生協が初めて夜行スキーバスのチャーター便を戸狩スキー場に派遣するとのことである。料金が安いというので参加することにした。バスの運転手も初めて冬の信州路を走るとのことであった。ぐっすり眠っている夜中に「みなさん起きて降りて下さい。男の人はバスを押して下さい」と起こされた。バスが積雪で見えなくなっている側溝に脱輪したのである。やっと脱出してしばらくすると「みんなさん・・・」である。3回ほど起こされてバスを押したが、今から思うと怖い話である。

スキーウェアは買ったが、金を節約するために靴は生協で借りた。スキー板は物理に進んだ平野洋一君（鴨沂高校出身、私の息子の先輩）が「物置に古いスキーがあったと思う」と言って探してくれた。初めてスキーを滑るのでどんなスキー板が良いのか知らなかったが、とても長いスキー板で2m以上ある。さらに、はじめから無いのか取れてしまったのか、エッジの金具が無い。いざ、滑り始めると、長いスキー板はスピードが出るのが分かった。おまけにエッジが効かないから、ターンがしにくい。ひたすら、猛スピードの直滑降である。止まるときは上手に横倒しにこける。スキー教室に入ったときの最初の練習が安全なこけ方の練習であった。これは今にいたるも、テニスで走っていて脚がもつれて倒れるときに大いに役立っている。こけて大きな怪我をしたことは一度も無い。

